

Second-order blind source identification(SOBI) アルゴリズム

株式会社 シグナルアナリシス 関原謙介

1 データモデル

観測データがある時間間隔で次々と観測され、時系列データとして得られる状況を考える。したがって、観測データ \mathbf{y} は時間変動するので $\mathbf{y}(t)$:

$$\mathbf{y}(t) = \begin{bmatrix} y_1(t) \\ y_2(t) \\ \vdots \\ y_M(t) \end{bmatrix}, \quad (1)$$

と表す。 $\mathbf{y}(t)$ は離散時間点 $t = t_1, \dots, t_K$ で観測されるとする。 K は観測時間点の総数である。この観測データが

$$\mathbf{y}(t) = \mathbf{A}\mathbf{u}(t), \quad (2)$$

と表されるとする。式 (2) において、 \mathbf{A} は混合行列 (mixing matrix) とよばれる。当然ながら、

$$\mathbf{u}(t) = \mathbf{A}^{-1}\mathbf{y}(t) = \mathbf{W}\mathbf{y}(t)$$

も成り立ち、 $\mathbf{W} = \mathbf{A}^{-1}$ を分解行列 (demixing matrix) と呼ぶ。ここで、 $\mathbf{u}(t)$ は M 個の「独立成分」 (independent component) からなる列ベクトルで、

$$\mathbf{u}(t) = \begin{bmatrix} u_1(t) \\ \vdots \\ u_M(t) \end{bmatrix}, \quad (3)$$

である。各成分 $u_1(t), \dots, u_M(t)$ は統計的に独立であるとする。すなわち SOBI アルゴリズムは 2 次の統計量を用いて、観測データのタイムコース $\mathbf{y}(t)$ ($t = t_1, \dots, t_K$) を独立な変動 $\mathbf{u}(t)$ ($t = t_1, \dots, t_K$) に分解するアルゴリズムである [1, 2]。つまり、観測データ $\mathbf{y}(t)$ ($t = t_1, \dots, t_K$) から、 $\mathbf{u}(t)$ の各成分が統計的に独立であるとの仮定をおき、独立成分 $\mathbf{u}(t)$ ($t = t_1, \dots, t_K$) と混合行列 \mathbf{A} を推定する。

2 SOBI アルゴリズム

要素 $u_i(t)$ と $u_j(t)$ のタイムラグ τ での相関は

$$\phi_{i,j}(\tau) = \frac{1}{K} \sum_{k=1}^K u_i(t_k) u_j(t_k + \tau) = \langle u_i(t) u_j(t + \tau) \rangle \quad (4)$$

で定義される．ここで、 $\langle \cdot \rangle$ は時間平均を意味する．タイムコース $u_i(t_1), \dots, u_i(t_K)$ と $u_j(t_1), \dots, u_j(t_K)$ が独立であるとは

$$\phi_{i,j}(\tau) = 0, \quad \text{for all } \tau \quad (5)$$

が成り立つことである．SOBI アルゴリズムは、この条件をできるだけ満たす $u_j(t)$ を与える分解行列 $W (= A^{-1})$ を見出す．

まず、ベクトル $u(t)$ のタイムラグ τ での相関行列を $R_u(\tau)$ と定義する．すなわち、

$$R_u(\tau) = \langle u(t) u^T(t + \tau) \rangle = \begin{bmatrix} \phi_{1,1}(\tau) & \phi_{1,2}(\tau) & \dots & \phi_{1,M}(\tau) \\ \phi_{2,1}(\tau) & \phi_{2,2}(\tau) & \dots & \phi_{2,M}(\tau) \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \phi_{M,1}(\tau) & \phi_{M,2}(\tau) & \dots & \phi_{M,M}(\tau) \end{bmatrix} \quad (6)$$

である． $i \neq j$ の場合において、タイムコース $u_i(t_1), \dots, u_i(t_K)$ と $u_j(t_1), \dots, u_j(t_K)$ が独立であれば全ての τ において $R_u(\tau)$ が対角行列になる．

データベクトル $y(t)$ に対するタイムラグ τ での相関行列を $R_y(\tau)$:

$$R_y(\tau) = \langle y(t) y^T(t + \tau) \rangle \quad (7)$$

と定義する．ここで、

$$R_u(\tau) = W R_y(\tau) W^T \quad (8)$$

の関係がある．SOBI アルゴリズムは複数個の $R_y(\tau)$ を対角化する行列を見つけることで、式 (5) を満たす要素 $u_j(t)$ を与える分解行列 W を見出すアルゴリズムである．

まず、 $\tau = 0$ である相関行列 $R_y(0)$ の固有値展開を

$$R_y(0) = V \Lambda V^T \quad (9)$$

と表す． Λ は対角成分が固有値である対角行列であり、 V は固有ベクトルを列ベクトルとする直交行列である．もし、 $\langle u_i(t) u_j(t) \rangle = 0$ ($i \neq j$) を満たす $u_j(t)$ でデータベクトル $y(t)$ を分解する分解行列 W を求めるなら、 $W = V^T$ とすればよい．実際、 $u(t) = W y(t)$ であるので、

$$R_u(0) = \langle u(t) u^T(t) \rangle = V^T \langle y(t) y^T(t) \rangle V = V^T R_y(0) V = V^T V \Lambda V^T V = \Lambda \quad (10)$$

となる．すなわち、得られた $u_j(t)$ は、 $\langle u_i(t) u_j(t) \rangle = 0$ ($i \neq j$) を満たす．この場合には $u_i(t)$ と $u_j(t)$ は無相関ではあっても独立ではない．

少しでも独立性の条件に近づけるため、条件を 1 つ増やし、ある τ の値 1 個を用いて

$$\langle u_i(t) u_j(t) \rangle = 0 \quad \text{および} \quad \langle u_i(t) u_j(t + \tau) \rangle = 0 \quad \text{for } i \neq j \quad (11)$$

を満たす $u_j(t)$ を与える分解行列 W を求めよう．この場合には，まず，次の行列 P を

$$P = R_y(0)^{-1/2} = V\Lambda^{-1/2}V^T \quad (12)$$

と定義し，これを用いてデータベクトル $y(t)$ を

$$z(t) = Py(t) \quad (13)$$

と変換する．この操作は白色化 (prewhitening) と呼ばれる．白色化されたデータ $z(t)$ に関するラグ τ の相関行列を $R_z(\tau)$ として， $R_z(\tau)$ の固有値展開を

$$R_z(\tau) = PR_y(\tau)P = U\Lambda_z U^T \quad (14)$$

と表記すれば， Λ_z は固有値を対角成分とする対角行列であり， U は直交行列である．そしてこれらを用いて分解行列は $W = U^T P$ と求まる．実際，

$$R_u(0) = \langle u(t)u^T(t) \rangle = U^T P \langle y(t)y^T(t) \rangle P U = U^T P R_y(0) P U = U^T I U = I \quad (15)$$

であるので， $i \neq j$ に対して，まず， $\langle u_i(t)u_j(t) \rangle = 0$ は成立する．次に，

$$\begin{aligned} R_u(\tau) &= \langle u(t)u^T(t+\tau) \rangle = U^T P \langle y(t)y^T(t+\tau) \rangle P U \\ &= U^T P R_y(\tau) P U = U^T R_z(\tau) U = U^T U \Lambda_z U^T U = \Lambda_z \end{aligned} \quad (16)$$

が成り立つため， $i \neq j$ に対して， $\langle u_i(t)u_j(t+\tau) \rangle = 0$ も成立する．すなわち，ここで求めた $u_j(t)$ は単に無相関 ($\langle u_i(t)u_j(t) \rangle = 0$) であるのみでなく，ある1つの τ において， $\langle u_i(t)u_j(t+\tau) \rangle = 0$ を満たし，独立な信号に近づいたものとなっている．

さらに独立性の条件に近づけるため，複数個のタイムラグを用いて，

$$\langle u_i(t)u_j(t) \rangle = 0 \quad \text{および} \quad \langle u_i(t)u_j(t+\tau_\ell) \rangle = 0 \quad \text{for } i \neq j \quad \ell = 1, \dots, L \quad (17)$$

を満たす $u_j(t)$ を与える分解行列 W を求める¹． τ が1個の場合と同様に，まず，白色化を行う．行列 P を式 (12) で定義し，これを用いてデータベクトル $y(t)$ を

$$z(t) = Py(t) \quad (18)$$

と変換する． $z(t)$ に関するラグ τ_1 から τ_L までの相関行列を $R_z(\tau_\ell)$ ($\ell = 1, \dots, L$) として， $R_z(\tau_\ell)$ を対角化する共通の直交行列 U を求める．このような U は存在し，文献 [4] に述べられている方法 (joint diagonalization と呼ばれる) により求めることができる．このような U を用いて，

$$R_z(\tau_1) = PR_y(\tau_1)P = U\Lambda_z^{(1)}U^T \quad (19)$$

$$\vdots \quad (20)$$

$$R_z(\tau_L) = PR_y(\tau_L)P = U\Lambda_z^{(L)}U^T \quad (21)$$

¹ τ が2個以上の SOBI アルゴリズムは TDZEP (temporal decorrelation source separation) と呼ばれる場合がある [3] .

と τ_1 から τ_L までのラグを持つ相関行列を対角化できる．ここで， $\Lambda_z^{(\ell)}$ は対角行列であり， U は直交行列である．したがって，分解行列はやはり $W = U^T P$ と求まる．実際，式 (15) と全く同様に $i \neq j$ に対して， $\langle u_i(t)u_j(t) \rangle = 0$ は成立する．次に，

$$\begin{aligned} \mathbf{R}_u(\tau_\ell) &= \langle \mathbf{u}(t)\mathbf{u}^T(t + \tau_\ell) \rangle = \mathbf{U}^T \mathbf{P} \langle \mathbf{y}(t)\mathbf{y}^T(t + \tau_\ell) \rangle \mathbf{P} \mathbf{U} \\ &= \mathbf{U}^T \mathbf{P} \mathbf{R}_y(\tau_\ell) \mathbf{P} \mathbf{U} = \mathbf{U}^T \mathbf{R}_z(\tau_\ell) \mathbf{U} = \mathbf{U}^T \mathbf{U} \Lambda_z^{(\ell)} \mathbf{U}^T \mathbf{U} = \Lambda_z^{(\ell)} \quad (22) \end{aligned}$$

が成り立つため， $i \neq j$ に対して， $\langle u_i(t)u_j(t + \tau_\ell) \rangle = 0$ が $\ell = 1, \dots, L$ に対して成立する．したがって，ここで求めた成分 $u_j(t)$ は独立性の性質を強く満たすものである．

3 まとめ

SOBI アルゴリズムを用いたアーチファクトの除去は次の手順で行う．

1. データ $\mathbf{y}(t)$ に対するラグゼロの相関行列 $\mathbf{R}_y(0)$ を求め，この行列の固有値展開から白色化を行う行列 P を求める．
2. 複数個のラグにおいて相関行列 $\mathbf{R}(\tau_\ell)$ ($\ell = 1, \dots, L$) を求め，これを共通対角化 (joint diagonalization) することにより対角化直交行列 U を求める．
3. 分解行列 (demixing) 行列 W を $W = U^T P$ から求め，さらに，独立成分 $\mathbf{u}(t)$ を $\mathbf{u}(t) = W\mathbf{y}(t)$ から求める．
4. タイムコース $u_j(t_1), \dots, u_j(t_K)$ ($j = 1, \dots, M$) を調べ，アーチファクトと思われる成分はゼロと置き換える．
5. アーチファクト成分をゼロと置き換えた成分ベクトルを $\tilde{\mathbf{u}}(t)$ とすれば，アーチファクト除去後のデータベクトル $\tilde{\mathbf{y}}(t)$ を $\tilde{\mathbf{y}}(t) = P^{-1}U\tilde{\mathbf{u}}(t)$ から再構成する．

参考文献

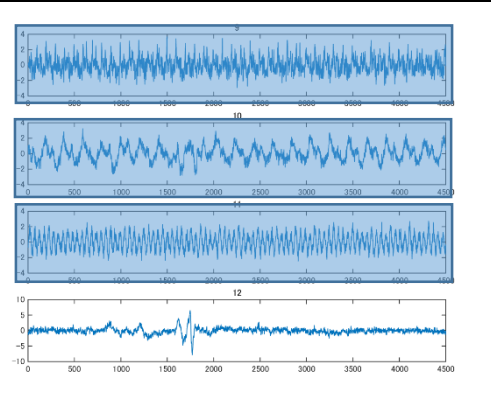
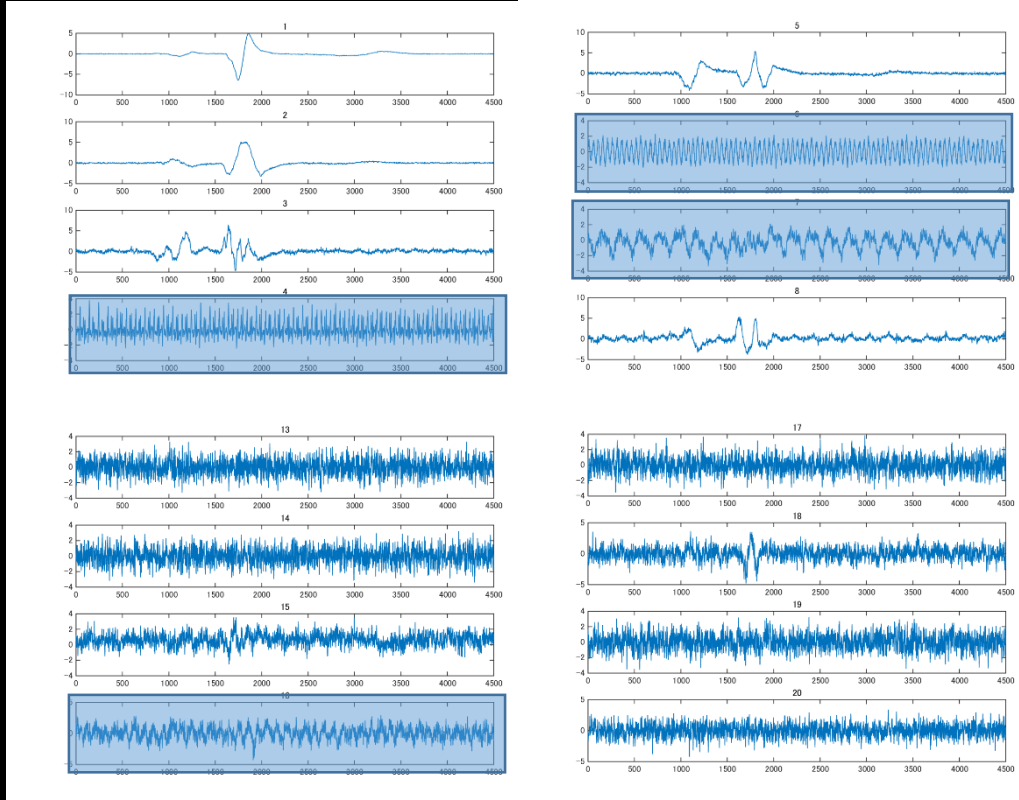
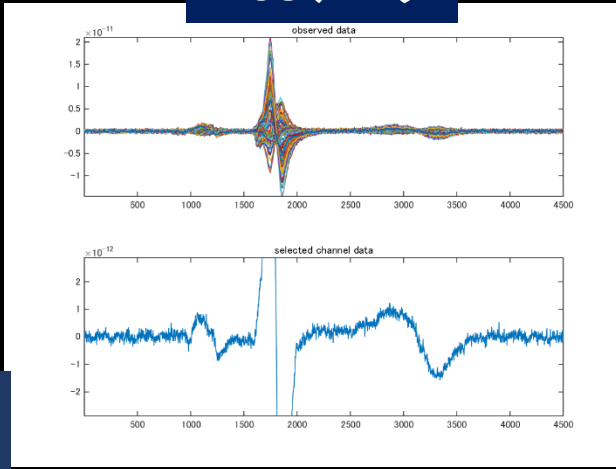
- [1] L. Molgedey and H. G. Schuster, "Separation of a mixture of independent signals using time delayed correlations," *Phys. Rev. Lett.*, vol. 45, pp. 434–44, 1997.
- [2] A. Belouchrani, K. A.-Meraim, J.-F. Cardoso, and E. Moulines, "A blind source separation technique using second-order statistics," *IEEE Trans. Signal Process.*, vol. 45, pp. 434–44, 1997.
- [3] A. Ziehe and K.-R. Müller, "Tdsep: an efficient algorithm for blind separation using time structure," in *ICANN 98*, pp. 675–680, Springer, 1998.
- [4] J.-F. Cardoso and A. Souloumiac, "Jacobi angles for simultaneous diagonalization," *SIAM J. Matrix Anal. Appl.*, vol. 17, pp. 161–164, 1996.

東京医科歯科大学におけるMCGデータから 冷凍機の振動ノイズ除去実験

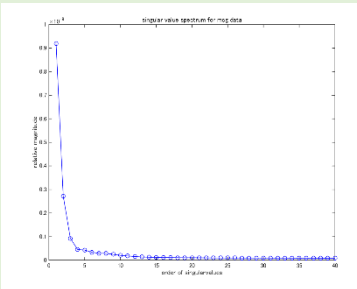
SVDによりdimension reduction:
120センサーデータ ➡ 20タームコースデータ

ICA アルゴリズムにより得られた20個のコンポーネント
(青いウィンドウで囲った成分を振動のイズ成分と推定)

MCGデータ

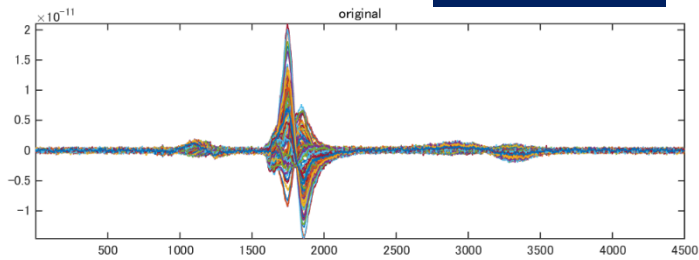


特異値スペクトル

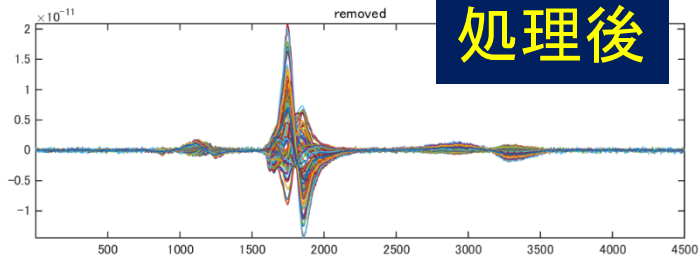


実験結果

処理前

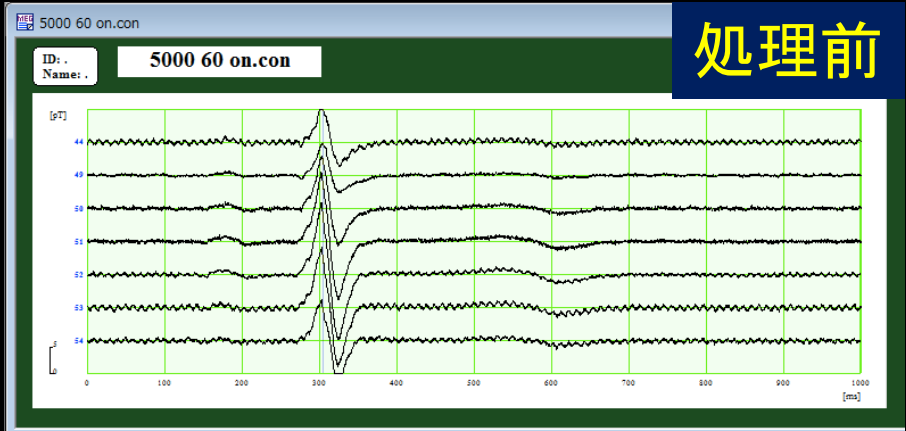


処理後



波形拡大表示

処理前



処理後

